

災害制御可能感がもたらすもの

○及川康¹

¹東洋大学教授 理工学部都市環境デザイン学科

1. 問題意識

米国の歴史家モリス・バーマンは、近代の世界観のきわ立った特徴として「我々の知識もまだ完璧とはいかないにせよ、残っている数少ない誤りも次第に改正されてきているのだし、いずれは完全な正確さをもって自然を解明し、アニミズム的思い入れや、形而上学的思い上がりからいっさい自由になるだろう——こんな思いを、近代は常識とした。以前の世界観を劣ったものとして、自分たちはもう卒業した幼稚な世界観として見る。昔の人間は、我々のような高度な科学を持たなかったのだ、ああいう子供じみた考えに導かれていたけれども、いまや人間の知性は「成熟」したのだ、今世紀に至って、かつての迷信や混乱した思考の山はほぼ完全に捨て去られたのだ、と。」(モリス・バーマン 2019: p.77) と述べている(嘆いている)。同様の構図は防災技術全般に対する世間一般の認識(期待)にも見出し得る。すなわち「対策を強化すれば災害を完全に防ぎ得る」との過信である。本稿では、これを片田(2020: p.141)に倣い「災害制御可能感」と呼称する。

片田(2020)は、日本の防災に必要なとされる根源的な論点のひとつとしてこの災害制御可能感の「払拭」を強調する。強い災害制御可能感を抱く住民においては、自身で主体的に防災対策に取り組む姿勢が希薄となり、同時に、防災行政への依存意識が高まってしまう。このことを仮に「懸念ロジック」と呼称するならば、この懸念ロジックを無効化(すなわち住民の主体性を回復)すべく、その根源的な要因である災害制御可能感を払拭することが根源的に重要だと説く。

このような問題意識は本稿も共有するものであり異論はない。しかし、上述のような「懸念ロジック」が現に存在するのか否かについての学術的検証は十分に得られているとはいえない。また、その災害制御可能感はどのような要因によってもたらされ得るのかについての統一的な見解も十分ではない。したがって、これらの点に関する検証を得ておくことは、上述の問題意識の正当性を補強するものとして決して無駄ではないと考えられる。そこで本稿は、この懸念ロジックの存在可能性に関する検証を試みた結果を報告するとともに、この災害制御可能感をもたらす要因に関する仮説について考察を加えるものである。

表1 調査実施概要

日時	2022年2月9日~11日
方法	Web アンケート
対象者	東京都墨田区在住者(性別年代別で均等割付)
回答数	600票 (回答に不備のある回答者を除いた有効回答は542票)
<主な設問手順>	
(1) 墨田区洪水ハザードマップを閲覧	
(2) 【災害制御可能感】[Q1] このような浸水の可能性は、しかるべき部局の人たちが努力したとしても排除はできないと思う(1: そう思う~4: そう思わない)	
(3) 【自身】[Q2] このような浸水の可能性があらかじめわかっているのなら、自分も対策を講じて致命的な被害を避ける努力をしていきたい(1: そう思う~4: そう思わない)	
(4) 【他者】[Q3] このような浸水の可能性があらかじめわかっているのなら、対策を講じて浸水しないようにしてほしい(1: そう思う~4: そう思わない)	

2. 懸念ロジックの存在可能性に関する検証結果

検証に用いた調査の実施概要は表1に示すとおりである。調査では、「洪水」を対象とし、まず、調査対象者の居住地の洪水ハザードマップを閲覧してもらった後に、それに対する【災害制御可能感】の把握を[Q1]で行い、防災対策に取り組むのは「自身」という認識の強度(【自身】と呼称)を[Q2]で、防災対策に取り組むのは「(自分以外の)他の誰か」という認識の強度(【他者】と呼称)を[Q3]で、それぞれ把握することとした。なお、調査対象地域の墨田区においては、荒川氾濫時にはそのほぼ全域が浸水する可能性が洪水ハザードマップに示されている。

図1は、回答者の【災害制御可能感】の違いごとに、防災対策に取り組むのは【自身】であるという認識の強度の平均値と、防災対策野に取り組むのは(自身以外の)【他者】であるという認識の強度の平均値を、それぞれプロットしたものである。これによると、【災害制御可能感】が強い回答者ほど、防災対策に取り組むのは【自身】であるという姿勢は希薄となること、そして、それと入れ替わるかの如く台頭してくるのが、防災対策に取り組むのは【他者】であるという強い姿勢であることが明瞭に確認される。災害制御可能感を払拭することが、自身で主体的に防災対策に取り組む姿勢につながる、という

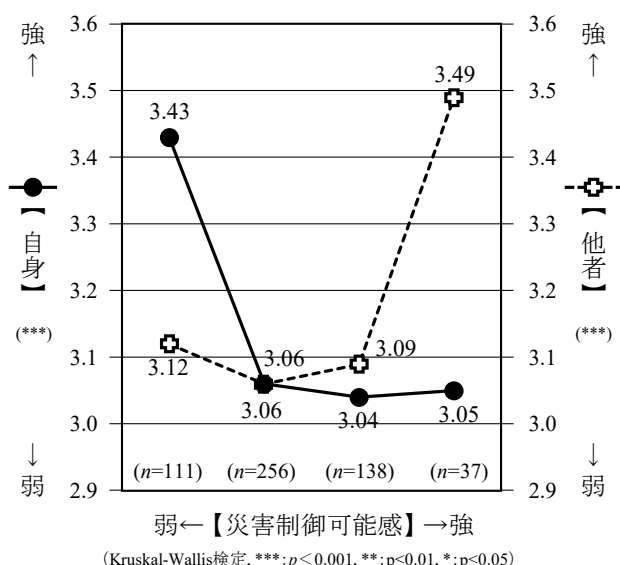


図1 「懸念ロジック」の存在可能性に関する検証結果

ことである。すなわち、前述の「懸念ロジック」が存在する可能性を強く示唆する結果となっていることがわかる。

3. 災害制御可能感をもたらすもの

ところで、この「災害制御可能感」なるものはいったいどこから来るのであろうか。

そのひとつの仮説として、前掲のモリス・バーマンは次のような主旨の言及をしている。すなわち、西洋近代の人々は、私と私でないものを区別し、人間と自然を区別し、精神と身体を区別し…、というように、自分を世界から隔て、個人の意志という概念を持ち出して強調するようになり、その結果、自然の法則を理性的・合理的に理解し、自然を支配できるようになるのだと考えるようになった、と主張する。「個人の意志を強調」(前掲:p.61)という点に関しては「能動性の強調」とも換言しうる。つまり、能動性の強調によってもたらされるもののひとつが、本稿の議論の焦点である「災害制御可能感」である、という見立てはじゅうぶんであり得るだろう。

このような「科学的(=主体客体分裂的)」な認識のありかたを「参加しない意識」と呼称したうえで、それに対して、人類の歴史を通してみれば、世界のなかに自分を没入させる(「参加する意識」)ことによって人間が世界とかかわっていた時期の方がはるかに長いのであり、少なくとも現時点では「参加しない意識」が行き詰まりに来ているのは確かであるように思われる、というのがモリス・バーマンの著書「デカルトからベイトソンへ～世界の再魔術化～」の全体を通じた基本的な主張である。

「いまさらデカルト批判? またあの図式で? ニッポンの現代思想は、もっとずっと先を行ってるみたいよ」などという冷めた反応もあるに違いない(前掲:p.4)。しかし、1981年の原書の出版から約40年の期間を隔てた2019年の復刊時のあとがきにて訳者の柴田元幸は、この

ようなモリス・バーマンの基本的主張は「幸か不幸か(まあ不幸のほうが大きい) あまり、というか全然、古びていないように思える。2019年のいま、自他を隔てるべく一部の人が引く線は、なんだか前より太く濃く荒々しくなった気がする」と記している(嘆いている)。同様に、過度な災害制御可能感をもたらす主体性の欠如の問題も、本稿で示した検証結果を鑑みる限り、それは現代的課題として今もなお(幸か不幸か(いや不幸にも))生き生きと残存していると言わざるを得ない。

一般論として、能動的であることと主体的であることを同一視する傾向は、決して珍しいものではない。しかしここで興味深いのは、能動性を強調することは、災害制御可能感の増大をもたらす、その先にあるのが皮肉にも「主体性の減退」であるという“逆説”が示唆されるという点である。能動的であることは必ずしも主体的であることと同義ではないとする及川(2020, 2021)の主張を図らずも補強するかの如くである。意志(能動性)という概念をあくまでも「幻想」として信じてみるのはむしろ全く構わない。しかし、真に主体的であるためには、過度な能動性への妄信を避けてみること、すなわち「確固たる個人の意志」という概念への信仰から少し距離を置いてみるということがひとつの有効な方策となり得るのではなからうか、と思うのである。それは「参加しない意識」から「参加する意識」への転換と同義である。

「防災技術が生まれる前の太古の地点」への回帰を単に回顧主義的に推奨しようというのでは決してない。むしろ「防災技術に限界があること(災害制御可能感の行き詰まり)に薄々気づき始めている現在」の我々から始まる新たな探求という意味合いがはるかに強い。そのことによって新たに獲得されるものは、ひとは自然のなかに存在する一要素に過ぎないという認識への立ち返り、自然に対する謙虚な姿勢、防災対策を強化しても災害を完全に防ぎきることは出来ないという認識、そして、防災に対する真に主体的な姿勢である。

謝辞: 本稿は藤野天樹氏(東洋大学大学院理工学研究科都市環境デザイン専攻1年)との議論の内容を色濃く反映している。ここに謝意を表す。

参考文献

- Morris Berman (1981), *The Reenchantment of the World*, Cornell University Press (柴田元幸 訳 (2019), デカルトからベイトソンへ～世界の再魔術化～, 文藝春秋(初版1989, 国文社)).
- 片田敏孝(2020), 避難学確立に向けた議論のリフレーミング, 災害情報, No.18-2, pp.141-144.
- 及川康(2020), 主体的避難の可能性について, 災害情報, No.18-2, pp.135-140.
- 及川康(2021), 主体的避難のための臨床防災哲学, 日本災害情報学会 第23回学会大会 予稿集, pp.83-84.